

新型コロナが問いかけるもの

特集でも触れたウィズコロナは、感染拡大を警戒しながら社会経済活動を進めていこうとするものですが、一方で、人と人との間に距離をとる「非接触・非集合型」の時代への変化も予想されます。また今までなかなかできなかったオンライン会議やテレワーク、週休三日制の検討などが始まっています。これまでの暮らし・産業スタイルが、大きく変わってしまうかもしれません。

ところで、今年からスタートした「市民協働のまちづくり推進条例」は、これからの時代にふさわしい形で地域の諸課題を解決していくため、自治会や地域づくり協議会、NPO、ボランティア団体、事業者など、価値観や立場の異なる多様な担い手による活動を

大きな地域の力とし、相互に連携し、協働関係を築く「仕組み」を必要としています。

この仕組みづくりを具体的に示した「市民協働推進計画」(下図)では、様々な主体による議論を踏まえたうえで取り組み内容を決定し、進めていけるような計画内容になっており、協働・連携で、段階的に実施できることを大切にしています。

このプロセスを経ることによって、協働のすそ野が広がり、地域課題の解決につながる新たな協働事業が連鎖的に進むと思っています。今後、下記の9つの仕組みに沿った関係者間の議論の場を順次設置していきます。

本紙創刊号発刊後、「いろんな団体が活動されている」「市民協働センターに相談窓口があることが分かった」とのお声をいただきました。今後も、センターが活動団体の皆さんと行政などの橋渡し役となるよう取り組んでいきます。

(田中省吾/コーディネーター)



新たな協働の仕組みづくりの詳細についてはQRコードからアクセスください。

市民協働を推進する9つの仕組みづくり

仕組みづくり	事例
1 多様な主体の協働を進める仕組みづくり	中間支援組織の設立
2 地域づくりを推進する仕組みづくり	まちづくりセンターの機能強化
3 みんなで議論する話し合いの仕組みづくり	円卓会議の開催
4 新しいお金の流れを事業支援に活用する仕組みづくり	コミュニティファンドの設立
5 新しい形の共助を構築する仕組みづくり	シェアリングエコノミーの推進
6 情報共有・活用を図る仕組みづくり	情報共有サイトの創設
7 協働の担い手を育成・確保する仕組みづくり	コミュニティカレッジの開催
8 市が保有する情報を活用して課題を解決する仕組みづくり	データの公開と活用推進
9 先端技術を活用した地域課題を発見・解決する仕組みづくり	実証実験への参画

こちら
市民協働センター
です! VOL.02

社会のために「やってみよう」ことを実現するための活動や、地域づくり協議会の取り組みを支援する市民協働センターでは、その支援のために専門知識を活かしてアドバイスや協力を行う4人のコーディネーター(以下Co)がいます。そんなCoに迫る第2弾、桐畑淳Coを紹介します。

本職はデザイナー。本紙をはじめチラシなどの紙媒体のデザインはもちろん、市内博物館の企画展設置や空間デザインも手がけ、その仕事ぶりを知らず知らずのうちに目にしているはず。京都の芸術大学での講師も務め、「思いや情報を形にし、的確に伝え、共感を与えることができる、それがデザインの力です」と話します。

余呉出身で周辺の野山に詳しく、溪流釣り、キノコ採りとアウトドア好きな一面も。そんな桐畑Coにチラシや広報誌づくりで困ったらお気軽にご相談ください。



ご意見をお寄せください!

創刊2号となったコラボ。市内各地域での困りごとや課題を紙面を通して見える化し、改めて考える場になることをめざしています。

そこで、掲載内容に関して皆さんからご意見をいただきたいと思えます。感想はもちろん「こんな内容を取り上げてほしい」「うちの地域ではこんなことに困っている」といったリクエストや情報も大歓迎です。QRコードから専用ページにアクセスください。

コラボ! 読者アンケート入力フォーム QRコード



円卓会議を開催します!

円卓会議とは、多様な立場の人(ステークホルダーといいますが、地域の困りごとの解決をめざしてアイデアを持ちよりいろいろな話をする食卓のようなイメージの会議です。この場を通して、様々な現実、考え方、事例などが参加者から提供され、地域の「困りごと」が「社会課題」として見える化されます。

開催予定 令和3年2月

内容 地域づくり、市民活動、行政の各分野でウィズコロナを共通テーマに話し合い

※詳細はあってホームページなどでお知らせします。

ながはま市民協働センター通信

コラボ!



特集 コロナ禍の高齢者 孤立を防ぐ

コラボ! 今号の表紙

市内若手アーティストでつくる「長浜文化芸術ユース会議 はまかるnext」。1月9・10・11日に音楽劇「とりあえずあんみつ!」を上演。コロナ禍でのリモート稽古を経ての成果発表です!
(問)長浜文化芸術ユース会議 事務局 070-1795-2953

発行 ながはま市民協働センター

滋賀県長浜市高田町12-34さざなみタウン ながはま文化福祉プラザ tel.0749-65-6525
8:30~21:30 (火曜休館)
mail:katsudou@city.nagahama.lg.jp
http://www.nposhiga.com/



このまちに住んでよかった。長浜に暮らすみんながそう思えるように、さまざまな団体や個人が活動しています。その活動のかたち「長浜の市民協働」の今を伝えていきます。紙面の企画・編集・取材執筆・デザインはすべてながはま市民協働センターコーディネーターが担っています。



孤立を防ぐ

コロナ禍の高齢者



TOPICS 特集

ウィズコロナといわれるように、社会・経済活動を再び盛り上げる機運が高まっています。

そんななかで感染リスクの高い高齢者は、依然として交流や訪問の機会が減り、孤立気味になってしまうケースがあります。

そんな現状と、私たちにできることを考えました。

01 誰とも会えない

「作った料理を近所の人におすそわけするのが日々の楽しみやったんよ。けど誰とも会えなくなり張り合いがなくなってしまった。仕方なく家でテレビを点けていても、1日中観ているのはしんどい。動かんかったから足腰が弱ってしまったのを実感するわ」

神前町に一人で暮らす山村純子さん（78）は自粛期間中をこんな風に振り返ります。同町を含む長浜中心市街地一帯は、高齢一人暮らし、高齢者のみの世帯が増加し、山村さんのようにコロナ禍によって、活動や交流が途絶えてしまう状況が生まれていました。同地域の健康推進員からも「お年寄りがまったく外を歩いているのが気になっている」「因果関係は明確ではないものの認知症が進行した話を数件聞いている」との声が挙がりました。

高齢者の健康の維持・向上には、外出や他者との交流、運動や社会参加が重要であることが認められています。そんななかでのコロナ禍は、介護や認知症のリスクを高めることにつながってしまうのです。



文/矢島絢子・レイアウト/桐畑 淳 (コーディネーター)

02 さみしい思いをしている

この状況は、自粛解除後も完全に解消されていません。高齢者の感染は重症化リスクが高く、感染予防対策をとった上でも以前のような場の開催や訪問を慎重に考えなければならなくなりました。また感染を極度に恐れたり、心配する家族から外出を控えるよう促されたりするケースもあり、自粛の気持ちを強める高齢者も少なくありません。

中心市街地で住民ボランティアが運営する高齢者の居場所「まちなかカフェ」では、自粛にともなう休会を経て6月に再開。運営代表の川村富沙江さんは「まちなかに住む人は身体を動かせる田畑もなく、本当に家に閉じこもりきりになってしまう。みなさんがお元気か、さみしい思いをされていないかと気にする日が続き、この状況をなんとかせねばとの思いが募りました」と打ち明けます。

10月の会では「通っていた大正琴教室がコロナで終了し居場所がなくなってしまい、ここに初めて来ました」と話す女性もいました。そして山村さんの姿も。再開から毎回参加しています。「月に一度と言わずもっと開催してくれたらいいのに」。そうつぶやきました。

03 連携して見守り支える

総人口に占める65歳以上の人の割合を指す「高齢化率」。長浜市では、28.32%（令和2年10月1日現在）にのぼり、およそ3人に1人が高齢者という状況です。さらに2040年には約4割の世帯が一人暮らしという将来推計が出ています。

こんな高齢化社会のなかで、行政や社会福祉協議会（以下社協）、地域包括支援センターなどの関係機関が連携、さらに地域づくり協議会や自治会、地域住民が一体となって見守り支える仕組みづくりが進められています。

市では高齢福祉介護課が中心となり、専門の見地から制度や情報を取りまとめ、連携を強化。それでも広域な長浜市において、地域ごとの特性に応じた細やかな支援や見守りは、そこに暮らす住民の力なくしては成り立ちません。



05 さまざまな形

「もっと開催してくれるといいのに」。多くの高齢者の声を代弁しているであろう冒頭の山村さんの言葉。担い手が増え多様な関わり方が生まれることで、こうした希望をサロンや居場所、転倒予防教室だけではない、もっと違った形で補うこともできるはずだ。

誰もが歳を重ねていきます。他人事ではない、将来の自分の姿としてまずは一歩を働きかけてみましょう。畑で作業するおばあさんに一声かけてみる、そこから始まる見守り・支え合いがあるはずだ。

04 頭を抱える

10月はサロンを再開する地域が増えました。下八木町や湖北町山本のサロンもそのひとつ。以前と異なるのが、おしゃべりや食事を楽しむ内容から簡単な体操でリフレッシュするといった流れになったことです。多くのサロンがこのような形で感染予防策をとり、冒頭のまちなかカフェも同様です。

“交流”は少なめ。それでも「休止中はさみしかった」「待ち遠しくて早く到着してしまった」「久しぶりにみんなと会えてうれしい」と、どの参加者からも明るい言葉が返ってきました。

下八木社会福祉委員会の横山秀士さんは「今年度は11月で終了し、来年以降も社会状況を考慮しながら内容を考えることになると思います」と慎重です。冬期は感染拡大のおそれもあり、開催の可否については答えがなく、関係者一同手づくりの状態です。



▲湖北町山本のサロン。記念すべき100回目が自粛後初の再開と重なった。



▲下八木町のサロンでは、市が推奨する「きゃんせ体操」を職員が指導しながら身体を動かした。

いっば 一歩踏み出す。

こんな取り組みの形

- 手紙でお元気ですか？ 〈木之本福祉の会〉
民生委員の見守り訪問も自粛する状況のなかで、少しでも元気になってもらえるようにと、9月に一人暮らし高齢者・高齢者世帯約100軒へマスクとお菓子をセットにした手紙を、手渡して配布。
- 電話で訪問 〈話咲隊〉
長浜地区地域づくり連合会が昨年結成したボランティア団体。希望する高齢者宅へ訪問しおしゃべりを楽しむことで、認知症予防などをめざして取り組み始めたところにコロナ禍が。現在「訪問」の形を電話に切り替えることでの継続を模索する。
- 淹れたてのコーヒーを 〈ほっこり茶屋〉
市社協と余呉福祉の会が連携し余呉地域で行うコミュニティカフェ「ほっこり茶屋」では、「来てもらうより、出向こう」と同地域のサロンへコーヒーを「出前」。豆から挽く香り高い味を楽しんでもらっている。10月は余呉町東野に向かい出した。

